

草庵仏教

第134号
(発行日)
2001年8月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638126 西宮市
小松北町1-2-3
電話・FAX(0798)
41-5346
(発行人) 土井紀明
メール naridoi.ne.jp@lycos.ne.jp
http://members.tripod.co.jp/souan211

《 開法会ご案内 》

- * 同朋の会 (念佛寺)
22日午後2時
.....
- * 聖典講座(浜屋西宮店)
第1土曜日午後3時
- * 念仏座談会(念佛寺)
第3土曜日午後3時

宗教はなぜ必要か

1 「現代に宗教は必要かどうか。宗教は必要ないものと思ってる人は多いですね」

d 「そういう人はどういう理由で必要だというのでしょうか」

1 「人が宗教に入る理由がよく貧乏・病氣・争い(貧・病・争)といわれますが、経済的に豊かになりましたから貧の苦しみは減りました」

d 「食うに困るといふ人は少なくなりましたね」

1 「それに医学技術の発達で病氣もけっこう治るようになり、健康保険も社会福祉も充実して、長生きができるようになりました。ですから病氣で働けなくなつて生活が困窮することも少なくなりました。さらに死の問題においても、(人のいのちは短くて)というのが(人のいのちはけっこう長い)となつたせいで、死ぬということをそんなに意識しなくてもよいようになり、死ぬ事を問題にしなくても生きれるようになってきたと思います」

d 「争いはどうですか。家庭内不和などは」

1 「それも昔は家庭内不和の代表は嫁姑の不和でしたが、いまは核家族で別居しますから、そういう問題は少なくなりました。また精神的な落ち込みとか不安

というものも、カウンセリングとか精神的なセラピーが行き届けば済むのではないのでしょうか」

d 「おっしゃるような点から(宗教は不要だ)という考えが一般化しているのが日本の状況なのかもしれません」

1 「宗教はやはり必要だと思えますか」

d 「ええ、宗教といつてもいろいろですが、真実の宗教であるかぎり、それはなくてはならぬものだと思います」

1 「宗教はそれほど必要なものではないでしょうか」

d 「人はともかく少なくとも私にはなくてはならぬものです」

1 「宗教はなぜそれほど必要なのでしょう。さしあたって皆さんにとって宗教が必要な理由は何ですか」

d 「私における理由を短くまとめてお話ししたいと思います。まず死と死後の問題です」

1 「宗教を信じて死ぬのは変わらなんでしょう」

d 「ええでも、私は弥陀の本願を信じることによって、死して浄土に生まれて仏のさとりを開くことを信じさせていただいています。かすかな信じようですが、安樂浄土に生まれると信じ

ています。そうすると、それ以前は(死んだら無くなる。骨と成って終わり)と思つていた時と日々の根本氣分が違つてきています」

1 「どう違つてきましたか」

d 「一言ではいえませんが、死を思うと、それまでは何かさびしい、どこか暗い、何か不安、要するにイヤだなあという氣分がありました。今は浄土に生まれさせていただくのだと思わせていただけるので、以前のような氣分が随分やわらぎ、有難いという氣持ちは起こることもしばしばです。(死ぬことも良いことだ)と言えぬのも決してウソではありません。ただ、死にたくないという思いもかなり強いと思います。しかし死にたくないという思いも邪魔になりません。起こるままナンマンダブツにおさめられていきます」

1 「死後の問題はどんな感じでしょうか」

d 「世界的に見て宗教に熱心な人々の多くは死後の問題、いわば(私は一体どうなっていくのか)(私の永遠の行く末はどうなるのか)という問題意識をもつています。イスラムの人々、熱心なキリスト教徒、チベットやタイなどの仏教徒、インドやバリなどのヒンズー教徒は宗教に大変熱心です。かれらの一番の関心事は、こうした問題だと思

発達しても残りつづける問題です。今の日本人は(結局のところ、私は一体どうなっていくのか)という問題意識が希薄です」

1 「いわゆる死後の問題ですね」

d 「ええそうです。次にエゴの問題です」

1 「エゴイズムの問題ですか」

d 「ええ。利己主義や利己心、仏教で言えば我執・我愛をいかにして克服するかです。小さな自我を超えて、自我に愛着する心を克服することは人類始まつて以来の、人に課せられた課題です。それは科学や経済では克服できないものです。また一般の道徳だけでは、形として利他的な善行は出来ても、善を行う中身は自我が中心になりやすいですね」

1 「中身は自我というのはどういうことですか」

d 「善行をすれば(我なせり)という誇りとなり、他者にたいして(お前は行いができていない)と他を責める、いわゆる自

【 盂 蘭 盆 会 法 要 】

8月15日 (水)
午後2時より

* 8月22日の同朋会は
休みます。

善他非の自我がどうしても世間の道徳にはついてまわります」

1 「なるほど。それと、利己心を克服するということは利己から利他へということですね」

d 「そうです。そのためには言ってみれば、〈小さな我〉が破られねばなりません、それには自我を超えて自我への固執（我執）を破るような働きに依らなければ、我執を越えることは困難だと思います」

1 「我執を破る働きというのは神とか仏とかいわれるものですね」

d 「そうです。私たち自我心を越えていくともその自我の殻を破ろうと働く働きが仏です。仏に帰依することによって我執を越えていく道に出るのだと存じます。日常的な私（自我）からでは我執を越えることはできないと思います」

1 「そういう点で、宗教はエゴイズムを克服する原理をもっているというのですね」

d 「ええそうです。ただ人は仏にであつたからといってすぐに自我心を克服してしまうことはできませんが、自我心を克服する根拠を与えられ、我執を克服していくプロセスに入ることが恵まれます。

人間の我執・我愛の煩惱は実に深くしてしどいものです。自分の修養努力ぐらいで何とかなるような底の浅いものではないと身にしみて感じてくると、な

るほど仏や神の救済がなくなつて知られま

1 「外に宗教の必要性は……」

d 「まことの智慧を与えてくださるのが真の宗教だと思います」

1 「智慧とは何ですか」

d 「ものごとを見るまことの眼です。何が正しくて何が間違っているか。何が真実で何が虚偽か、何が永遠で何が仮のものか、何が一番大事で何が二次的なものか、人間の尊さとは何であり、人間はなぜ平等かなど、ものを正しく見る眼となるもの、これは私たちにとつて極めて大事なもので、それを仏教では智慧とい

います。智慧を身につけていく、そこに宗教の大事な意味があります。釈尊や親鸞聖人の生涯をたどりますと、智慧が輝いています」

1 「今日、特に何が不透明かというところ、人が生きる本当の意味は何か」ということだと思

います」

d 「そうですね、生きる意味が見いだせず、ただ何となくただらと日が過ぎ去つて行く。その中で現状の生活や自分自身に不満のたまつた若者が自暴自棄になつて、犯罪に走るというケースが増えて

いるようです」

1 「この前、東京で高校生2人が〈死ぬ理由はないけど、生きる理由もない〉といつてビルから飛び降りて自殺しましたが、

生きる意味が分からないという人たちは非常に多いですね」

d 「ええ、経済的に豊かであり、便利であり、多くの知識はもつており、しかもいっぱい面白いものがあつても、それらは〈私は一体何のために生きているのか〉という問いには答えてくれ

ません」

1 「いわゆるニヒリズムの問題ですね。宗教はこの問題に対してどうなんでしょうか」

d 「宗教とは本来、〈あるべき世界観・人生観〉を与えるものです。確かな世界観・人生観は人間に生きる意味を与えるものなのです」

1 「仏教ではどうなんですか」

d 「仏教では、〈人生には誰もが心して求むべき真実まことがある〉ことをあきらかにしていません。人間はその真実（法）にであ

い、その真実によつて生きるべく生まれてきたといわれています」

1 「人間は真実に帰依して生きることが、この人生での眼目な

のですね」

d 「ええそうです。それを自利とい

があるのですね。その外に宗教の必要性はありますか」

d 「別して言えば、かぎらない愛にふれるのは宗教においてです。仏というも神というもその

中身は〈大いなる慈愛〉です。私たちはどこで心がいやされるか。それはかぎりなき慈悲によつて

です。人間同士の愛情はうるわしいものですが、人が欲

求するほどの十分な愛情を人間同士で与えあうことはできません。ですからいつも愛情の欲求

の愛はいつたんヒビが入ると容易に憎しみに変わります」

1 「私も心の底に何を求めているかといつと〈愛情〉だと感じ

ています。どんなに華やかな生活しても、愛を感じる

ことのない生活は根本的にさびしく満たされないですね」

d 「仏に出会つた人は〈大悲無倦（びだいむけん）常照我〉で、仏の

大悲はうむことなく我を照らしたもうとい

う、実にゆたかな情けに包まれて生きる

ことが可能です」

実行不可能という嘆きに帰する外なくなり

ます。ですから私たちは知らず知らず道徳を真剣に

考えないよう

に自己防衛をして何とか生活しているのです。い

わゆる道徳にたいして鈍感になるか、いつ

でも〈自分はそこそこ善人だ〉と自己肯定して、や

つと気楽になつて

いるのです。ということ

は道徳は大事とい

ながら、実際は道徳を適

当に軽んじ、自己批判も

できるだけ避けなくては、

気楽に生きられないのが人間なの

ですね」

1 「宗教無しの道徳だけで生き

ようとすると、道徳を適

当に無視しなくては生きられないとい

う自己矛盾を起すのです

ね」

d 「ええそうです。それで、己

の不道徳さを知つてこれを愧

じ、しかも出来るだけ道徳を守つて

いこうとい

う心情は、むしろ宗教から生ま

れてくると

思います」

1 「なぜ宗教からですか」

d 「自分の不道徳さを素直に認

めることが出来るのは、悪し

き私の全体を

摂取してく

ださる大

悲の仏心に

照らされて

可能です。

しかも仏の

大悲心に

ふれた人は

仏の心にか

d 「最後になります。この世のものを支えとして生きることは、いわば健康や財産や才能や子供やつれ合いなどを支えにすることなのです。しかしこれらは無常転変して、どうなるか分かりません。ですからそういうものを支えとする生き方は、必ず大きな不安を抱えています。それに対して仏を支えにする人は、仏は永遠不変の真実ですから、この世の良きもの美しきもの、どれもど動乱しても、揺るがない支えをもって生きることができましよう。このような人生の帰依処の問題は宗教の第一の領域です。

それで、この世の宝すなわち健康や財産や子供や才能や社会的地位・職業や学歴や家柄や美貌などの価値を支えにした世間的な生き方は、こうした世間のさまざまな宝に過度に執着することになりかねません。必要以上この世の宝を重大視してしまします。だからそれを自分が得ると誇り、失うと失望する。また他者が得ると妬み、無いと軽蔑したり差別したりします。人間に対する差別の原因の一つには、この世の価値だけにとらわれるところにあります。まことの尊き永遠の宝である仏にであ、い、仏のお浄土を我が帰る故郷と知らされて生きる人は、この世の価値や宝に過度に執着することから自由であることを許されていると思えます」

1 「宗教はなぜ必要かについてお話をくださったのですが、死・死後の問題、利己心という罪の問題、愛の問題、世界観・人生観の問題、ニヒリズムの問題、道徳の根拠の問題、動乱の人生の支えの問題など、人生にとつて極めて重要な問題に答えようとしているのが宗教なのだと思います。うかがうことが少し分かってきました」

(了)

信仰夜話

妙好人で名高い庄松同行（1799〜1871）の逸話に次のような話が伝えられています。

讃岐の国、木田郡植田村のある同行が大病になり、お医者さんからももう手の打ちようがないと云うことで匙を投げられました。このお同行さん、日頃熱心に聞法し、自分の信心は大丈夫と思つていましたが、重い病になり余命幾ばくもないとなつた時、確かと思ひこんでいた信心が壊れてしまいました。

さて、そんなことでこのお同行さん、（これではどうしよう、どうしよう）と大変苦しみました。家族の者が心配して、これはひとつ厚信の庄松さんにここ

まで来ていただいて病人に信心のお話をしてもらおうではないかということになり、庄松さんに事情を言つて家に来てもらうことにしました。そこで庄松さんがやつてきました。ところが庄松同行、家になると、病人のそばを通り過ぎて、隣りの部屋のお内仏で御礼をし始めました。家の者はあつげにとらわれて「庄松さん、庄松さん、今日お前さまに来てもらったのは、御礼のお勤めをしてもらうためではない。病人が後生の問題で苦しんでいるので、どうか病人に後生助かる話をしてやつておくれ」と言いましたら、庄松さん「己（お）らが本願つくつたでなし、助けてやるものを持つていてるでなし、何も聴かせるようなものはない、己（お）らやお前を生まれさせずば、正覚取らぬと誓いをたてた仏が、今ここに正覚取つてあるじやないか、これでも不足なのか」と言いました。この一言が隣りで臥していた病人の耳に突き刺すように響き、「ああそうであつたか」と大変喜ばれた、ということでした。

この話に妙味があるのは、まづ庄松さんが病人のそばに行かず、阿弥陀仏の前に座つて合掌しお勤めをしようとされた点です。それは「阿弥陀様、私どものような者をお助けくださいますことまことに有難うございませす」という御礼の心を表すため

の合掌であり勤行でした。これは、我や人を助けるのは阿弥陀様ばかりであるという真実を庄松さんは身の行いで示したことになりました。そして、庄松同行が家に着くと、さつさとお内仏の前に座つてしまったものですから、庄松さんに「早く病人に話をしたい」と申しした時に、庄松同行「オレが聞かせて助けるようなものは何ももっていない」と言い、阿弥陀様を示して「己（お）らやお前を生まれさせずば、正覚取らぬと誓いをたてた仏が、今ここに正覚取つてあるじやないか、これでも不足なのか」と言い放ちました。これがはなはだ有難いところでした。真宗の信心はこの一点に気がつくことと、いつても過言ではありません。すでに阿弥陀仏となつておられ、南無阿弥陀仏とお念仏となつて表れてくださっていることは、「衆生（汝）を助けられなかつたら仏にならない」と誓われたお方が、すでに永劫の修行において仏になつておられるということ。それは「汝は助かるぞ、助けるぞ、間違いないぞ、その証拠が南無阿弥陀仏であるぞ」とお知らせ下さり、喚びかけて下さるおすがたであります。「ここに正覚取つた阿弥陀様がいなさる。もうオレやお前さんの救いはすでに仕上がっているじやあないか。これでも不足なのか」と庄松同行は仰せられるのです。

ズバリ、救いのかなめを言い放つ一言がこの病人の心底に届いたのでした。（了）

【秋季彼岸会法要】

9月22日（土）

午後2時より

*どなたでもご自由にお参りください。

〈住職つれづれ日誌〉

例年よりも早く猛暑がやって来た感じである。朝起きると身体がぐったりとして起きづらい。スカッとさわやかな朝起きは願えども来たらず。

*七月十四日。H寺の法話に。H寺にご養子が入寺され、長年の跡継ぎ問題に一件落着された。住職ご夫妻も安堵の喜びであった。全国に跡継ぎ問題を抱えているお寺がごまんとあり、特に過疎地の寺の後継者問題は深刻である。

*七月二十一日。念仏座談会当日。クラーが故障。うだるような暑さの中でお勤め。後、別室に移動して、信仰座談。どうやら古い型のクラーの室外機は周囲があまり高温になるとトラブルとのこと。サーモスタットも故障していた。総勢四名の座談会。念仏・信心・靖国問題などを語り合う。

歎異鈔

第十一章第一講

一文不通のともがらの念仏もうすにおうて、「なんじは誓願不思議を信じて念仏もうすか、また名号不思議を信ずるか」と、いいおどろかして、ふたつの不思議の子細をも分明にいいひらかずして、ひとのころをまどわすと、この条、かえすがえすもころをとどめて、おもいわくべきことなり。

(歎異鈔第十一章より)

(現代語訳)文字の一つも知らずに念仏している人に向かって、「おまえは阿彌陀仏の誓願の不思議なたらきを信じて念仏しているのか、それとも名号の不思議なたらきを信じて念仏しているのか」といって相手をおどろかし、この二つの不思議について、その詳しい内容をはつきりと説き明かすこともなく、相手の心を迷わせるということについて。——このことはよくよく気をつけて考えなければなりません)

浄土の教を聞いて素直に念仏している人たちに向かって、浄土の教を少し専門的に学んだことを誇りに思っている人が「お前たちは弥陀の本願で助かると思っているか、それとも称える念仏で助かると思っているのか」と、さも自分たちは分かっているつもりになって、無知な人たちに問題をふっかけて驚かす。そういうかしこぶった人たちこそ、本願と念仏とは離れないものであるのに別なものに誤って受けとり、不可思議な本願と念仏

の正しく詳しい内容を知らず、それゆえに人々に正確に説き示すことをせず、いたずらに人々を迷わしている。このことはよくよく考えてみなければならぬ。と、そういうように著者の唯円房は申されるのでありましょう。

「不可思議な本願によって助かるか、あるいは不可思議な名号(念仏)によって助かるか」などと考えることがすでに、弥陀の本願を本当にいただいているに証拠でしょう。本願によって救われるといってもいいし、お念仏によって救われるといってもいいし、なんら矛盾はありません。両方は無理なく一つにいただけるものです。それが何か別のよう思うのは、弥陀の本願を信じないで、本願を知識的に頭で受けとっているだけだからでしょう。

大体、弥陀の本願を思想的に知識として受けとって、それで分かった事にしてしまうと「阿彌陀仏の誓願不思議で助かる」ということは分かるけれども、お念仏がお助けであることは分からないものです。ところがお念仏がそのままお助け、と分からないということ、本願は「本願によつて助かる」ことも分かっていないのです。ただ知的に頭で理解している、つまり本願を思想化しているのです。

弥陀の本願を思想化するとどういふことになるかについて、金子大栄師の『歎異鈔聞思録』の中の歎異鈔第十一章のところで

「その結果はどういふことになるかといえ、(弥陀の本願が分かってくれば分かった時に即ち仏である。往相というも還

相というも一つである。それは社会的には一つの実現思想となってくる。如來の本願というものは、それをわれわれが社会的に弘めることによって浄土というものがこの世へ実現するのである。要するに本願を信ずることによって浄土がこの世に実現することになるのである」と、こういふふう論ずるのは当然過ぎるほどに当然でありまして、その由つて来るところは一体どこにあるかというところ、すべてこれは念仏を申さないで本願を論じようとするところにあるのではないかと思ひます」

そこにはもはや「弥陀の本願に自己が助けられる」必要はなく、念仏も無用になりません。弥陀の本願は大事だが、念仏は無くてもかまわないとなります。そして悪くすると、本願は危険思想にもなりえます。すなわち弥陀の本願を思想として、人間の側から主張されると「弥陀の本願はどんな悪を為そうとも助かる。どんな悪人でも救われる。どんな悪も許され、どんな悪をおかしても救われる」となりかねません。そうになると、それは社会秩序を乱し、倫理道德を破壊する危険な思想になってしまいます。

例えば弥陀の本願を思想化するとどうなるのでしょうか。

「阿彌陀仏の本願というのは要するに人間の心の中にある純粋な本心の願いである。私たちは自分の中にあるこの純粋な本願を見失って、自我の欲望をかなえようとして己を害し他者を害している。阿彌陀仏の本願を知ることによって自分の本心の願いに目覚め、我欲に生きるのではなく自分の本心の願いである本願に生きるようにしなければならぬ」といふ理想主義になったり、更には

「弥陀の本願には、人間は平等なる尊い存在であり、人間はお互いに自由で平等な共同体としての交わりをなすべく願われている。一人一人が弥陀の本願に生き、この本願にそつて社会を革新しなければならぬ」といふような、「世直しの論理」に、弥陀の本願がなつてしまいます。

「世直しの論理」に、弥陀の本願がなつてしまいます。

弥陀の本願は仏のお言葉として、我が身の上に聞かせていただく時、大悲の深さに頭が下がります。弥陀の本願を仏の仰せとして聞かせていただく時、

「汝、極重の悪人よ、我が名を称えよ。罪はいかほど深くとも、汝を見捨てない。必ず助ける、我をタノメ」と。この仏のお言葉を聞かせていただく時、大悲が身にしみて有難く感じられます。

弥陀の本願は、人間が人間に向かつて主張する思想ではなくて、どこまでも仏の仰せとして、我らが身の上に(お聞かせいただく)ものです。

このように弥陀の本願を思想化すると理想主義になったり、世直しの思想になったり、悪くすると人倫道德を破壊する魔説となつてしまいます。

なぜ本願が思想化してしまうのか。その大きな理由の一つは、金子大栄師が申される如く、念仏を抜きにして本願を受

けとろうとするからでありましょう。お念仏を申すことをしないで本願を論じ、頭だけで観念的に弥陀の本願を受けとるからです。

(丁)